

ものへの依存・人への依存

河合俊雄 (こころの未来研究センター教授)

■依存の研究と社会の変化

依存に関する心理学的研究としては、様々な視点からの研究が行われてきた。発達心理学の方からは、母親に依存するというあり方から自立へというプロセスでの研究がなされてきた。社会心理学的には、依存というものに対して、文化差という視点での研究がなされてきた。たとえば西洋人に比較しての日本人の依存性の高さもその1つで、土居健郎による「甘え」という心性も、そのことに関係していると思われる。また臨床心理学は、人に対する依存に関連する問題と同時に addiction などの依存の問題に取り組んできた。

近年、ネットゲームにはまる事例報告が増えている。これはゲームというものに依存しているのであろうか、それとも対戦相手という人に依存しているのであろうか？ 本プロジェクトでは、ものへの依存と人への依存という視点で、依存についての総合的な心理学的研究を行っていく。そのことにより、社会的きずなが弱まってきているとされる現代社会において、人への依存はどのように機能し、またものへの依存が強まっているのか、その相互の関係はどのようになっているのかを検討していくつもりである。この研究は、現代におけるこころのあり方へのアプローチとして、重要な視点となりうるはずである。

■ものと人の接点:移行対象

2010年度では、ものへの依存と人への依存の接点になる現象と思われる「移行対象」(transitional object)について、黒川嘉子(佛教大学)を招いて研究会を行った。

移行対象とは、特定のものに強い愛着を示し、就眠時や外出時に

肌身離さず持とうとする乳幼児によく見られる行動(図1)に対し、D.W.Winnicott(1953)によって概念化された。ほどよい母子関係を基盤として、母親を象徴的に代理し、主観的現実と客観的現実のあいだの中間領域での体験を可能にし、自らを慰める(soothing)ものとして、絶対的依存から相対的依存、そして独立に向けてという発達過程において、その移行を助ける健康で普遍的なものであると考えられた(図2)。確かに、乳幼児にとって、特定の愛着物を持つことは、象徴機能の発達、心理的支えとして機能しているが、欧米圏において、移行対象発現率が60~90%と高率であるのに対し、日本においては約30%であり、添い寝などの就眠様式や身体接触の多い養育行動をとる文化圏において発現率は低く文化差が大きい。

黒川(2004)においても、移行対象発現率は33.4%であったが、就眠時に移行対象を持ちつつも同時に母親の存在を必要としている子どもが43.3%もいること、また、移行対象を必要としなくなった子どもでも母親の添い寝を求めると、依存の対象が「母親」から「特定の愛着物」へという1方向では考えられないことが示された。また、ここでは、母親の存在の有無が問題となるのではなく、母親の身体をいじったり、絵本読みやお話をする、抱きしめるなど、その親子の中でユニークな関わりが創り出されており、依存するために母親という「人」が必要か、特定の「もの」が必要かという選択ではなく、「人」と「もの」が重なり合い、共に体験しながら1人になる、1人で体験しながら共にあるという逆説が成り立つ体験の重要性が明らかになった。こうした乳幼児期の子どもや母子の関わりから、「個」としてのあり方や母子



図1 A.A.ミルン著、石井桃子訳『クマのプーさん』(岩波書店) クマのぬいぐるみをいつも手放さないクリストファー・ロビン

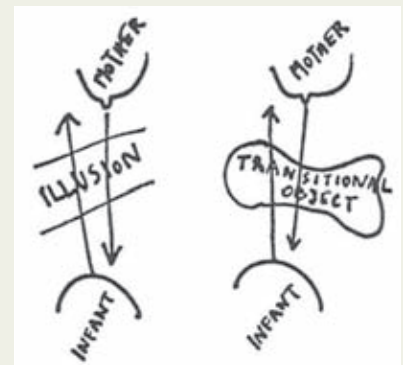


図2 Winnicott(1953), Transitional objects and transitional phenomena: A study of the first not-me possession.

分離に代表される「分離」のとらえ方、「もの」に対する所有の感覚やアニミズム的思考という依存の背景についてのテーマが浮かび上がってきた。